

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2011年1月14日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合)【No. 183】

JR東日本の労政に危機感を募らせる東労組の心境は？

前号では、JR東日本経営幹部の革マル派排除戦略の存在の裏付けについて検証した。JR総連元副委員長の四茂野修氏による「われらのインターVol.11」(2008年7月15日発行)の連載記事「一連のJR総連弾圧を仕組んだ者たちの素顔(上)」で、同氏は、さらに以下の通り述べて不信感を露わにしている(p.33~34)。

佐藤氏は続けて次のように言う。

JR東日本の発足当時、三人組っていわれたのがいまして…それ以前に「国鉄改革三人組」もいますけども…JR発足後には「JR東日本三人組」、つまり松田常務取締役を支える三人組がいて、その一人がこの野宮勤労課長なんです。もう二人めはNという総務課長、三人めが、何度も話に出てきました内田人事課長です。この三人が、松田常務の息のかかった、一番頼りになる三人組ですよ。だから三人組は、内田さんを筆頭に…中心にして、必ず革マルを排除するんだと…いってたってことです。私の知る限りでは、そのときまで力を蓄えて…がんばってこうとういうふうになってたんですよ。それが平成2年か3年に…松田さんがどんどん…松崎さんのハードルっていうか、飛び越えちゃって…抜き差しならない関係…掌に載っちゃうわけです。まあその前に住田さんが載ってたんだらうし、そういう状況のなかで…どんどん、どんどんがっかりしていくわけですよ。…(後略)

こんな話を聞かされると、いったいこの会社の経営陣は何を考えてこれまでやってきたのだろうとつくづく考えさせられてしまう。

四茂野氏は論文の後段で「ここに登場したJR経営幹部は、普段見せるにこやかな笑顔や親切そうな態度とは異なり、明らかに経営の論理、資本の冷酷な論理にもとづいて考え、判断し、行動している」などと警鐘を鳴らし、最後に「密かにうごめてきたJR各社の経営者に立ち向かうためにも、JR内労働者の階級的な団結の拡大に向けた努力が開始されなければならないだろう」と締め括っている(p.40~41)。会社への危機感が募るJR総連、東労組の幹部らは、現在、このような心境にあるのではないだろうか。

会社の職場管理に不信を露わにする東労組千葉委員長！

こうした検証を裏付けるように、JR東労組の情報類には、松崎氏の死去に伴い、会社への不信が嵩じる様子が如実に表れてきている。千葉委員長は、ホームページの年頭挨拶で、「JRは、今年で25年目に突入します。四半世紀にならんとするJR東日本も、国鉄改革とその精神がいつの間にやら薄れたり、変質させられようとしているのではとの危機感を持ちます。いわゆる『ローカルルール』の是正」と称して、この間の労使で確認してきたことを無視するだけでなく、社会常識を越えた事象や、一方的・強権的に職場管理を進めようとする姿勢が、特に運車職場を中心に表れてきています。労働組合活動を職場から排除していくための規制を認めることはできません。組織として統一して対処していきます」と述べている。JR東日本では、これまで「東労組に非ずば人に非ず」という偏重労政の下に、彼らは、他労組の組合員や組織の意に沿わない者を徹底的に弾圧、排除してきた。会社に文句を言う前に、自らの非道を反省して姿勢を改めるのが先ではないのか。職場浄化に反発する東労組は、やはり、汚れた水にしか棲めない組織なのだろう。